

皮肉 Irony の時代における教育

岡 本 道 雄

(I)

二十世紀の前半が、二つの世界的規模の戦争によって、人類史上の如何なる五十年よりも多くの人々を戦争で失ったこと、又ナチスの如き野獣の国家の出現によって、罪なき多くの人々の非人道的な殺害がなされたこと等は、今日の時代を、「悲劇 tragedy」の時代と呼ぶのにふさわしい様な状況を示している。そして第二次世界大戦が終ったここ十五年間に於ても、尚次の戦争への危険が孕まれ、しかもそれが原子兵器の発達によって、予想もつかない程の破壊力を暗示していることは、益々、この時代の「悲劇的」様相を深めているかのように見えるのである。

しかし、私はニーバーと共に、現代は「悲劇」の時代であるよりむしろ、「皮肉 Irony」の時代であると呼びたいと思う。なぜなら、現代の危機的状況を分析し、解釈するにあたって、それを「悲劇 tragedy」としてみるよりは、それを「皮肉」としてみる方が、より多くの正当性と信憑性をもつと考えられるからである。

ある時代の歴史を、「悲劇」として見る「悲劇的」な歴史解釈は、すぐれてギリシヤ的な解釈である。つまり「悲劇的」状況とは、かのギリシヤ悲劇におけるプロメテウスが、天上の火を人間に与え、人間が動物以上の存在となり、自然を征服する技術や文明を生み出すのを助けたために、ゼウスの怒りにふれ、コーカサスの山の岩に繋がれ、秃鷹に肝臓を食われるという責苦にあり、しかも責苦にあいながらも、あくまでゼウスへの反抗を止めなかったという如き状況なのである。プロメテウスは、人間を自然的存在以上のものに引上げたことにおいて、人間の目からは善きことをなしたのであり、人類の恩人である。しかし、このことは同時に、神の目からは神の定めた自然的秩序を破ることであり、それ故、悪であり、傲慢 *hybris* である。プロメテウスは、これが悪であり、神の怒りにふれることを知っていた。そして又、人間を再び自然的秩序の中へ引戻し、ゼウスへの反抗を止めるならば、責苦から赦されることも知っていた。しかしプロメテウスは、あくまで人間に味方し、人間にとっての善をなすために、神に逆らう悪を意識的に選びつけ、悲劇の主人公になったのである。

要するに「悲劇」とは、プロメテウスの場合の如く、善をなすためには不可避免的に悪がともなう状況に於て、善を目的としながら、意識的に悪に巻き込まれることである。そしてそれは又、「ある高い責任を果すために罪にまみれ、あるいは、ある高い価値を、より高い、あるいは同等な価値のために犠牲にする¹⁾」ことでもあるのである。

この様に「悲劇」を規定し、この観点から今日の危機的状況を眺めるならば、それは、「悲

1) Reinhold Niebuhr, *The Irony of American History* p. vii [訳文はオーテス・ケーリ訳による。]

劇」の時代であるよりは、かえって「皮肉」の時代なのである。勿論「悲劇」の要素も現代には存在する。しかし「皮肉」の方が、より支配的なのである。なぜならば、一見「悲劇的」に見える現代の危機的状況の多くは、よく見れば、善をなそうとして、それに不可避免的に伴う悪を意識的に選んだ結果ではなく、善をなそうとして、それが無意識の内に悪に巻き込まれているといった状況であるからである。今日の危機的状況を深刻にしている米ソ両国の所謂冷い戦争も、夫々の国が自ら悪を犯かしているという意識なしにもたらされた悪であり、又原子兵器の破壊力も、自然科学者達にとっては、悪への意識なしに生み出されたものなのである。

又、現代の危機的状況の中には、「悲哀 pathos」と呼ぶにふさわしい状況もある。それは、二つの強国の間にはさまれた小国の場合の如く、又戦争によって住居を奪われた難民の如く、「理由もなく、負わすべき罪もない人生の偶然のくいちがいや混乱²⁾」によって、自らの力のおよばないところで自らの運命があやつられ、これから生ずる自然悪によって、苦しめられる人や国の状況である。ニーバーは、この様な「悲哀」も、今日の状況を支配的に特徴づけるものではないが、「皮肉」に従属し、「悲劇」と共に今日の皮肉の状況の陪音をなすものなのであると考える。

ではニーバーの言う「皮肉」とは如何なるものであり、更に現代の「皮肉の状況」は如何なるものとして扱えられるであろうか。

「皮肉」は「悲劇」との対比においては、自ら善をなすと思いつつも、無意識的に悪に巻き込まれることである。しかし、より詳しく言うならば、それは次の如きものである。ニーバーは言う。「皮肉は見たところ人生における偶然の不調和 fortuitous incongruities から起るが、よく調べれば単なる偶然だけではないことがわかる。不調和そのものは喜劇的 comic なものである。それは笑いをもよおさせる。この喜劇 comedy の要素を皮肉から完全にとりのぞくことは出来ない。しかし皮肉は喜劇以上のものである。もし不調和の中に隠されているある関係がみつければ、喜劇的な状況は皮肉的になる。徳の中に隠された欠陥によって徳が悪徳になる場合、力のある人や国家がその力に駆られて虚栄に走り、強さが弱さになる場合、安全性があまり頼られすぎて不安全に化する場合……これらすべての場合、状況は皆皮肉ののである³⁾。」

言葉を換えて言うならば、「悲劇」に対応する状況は「喜劇」である。つまり、善をなそうとして、それが無意識の内に悪になっているという違いは、それだけでは「喜劇」であって「皮肉」ではないのである。「喜劇」が「皮肉」になるのは、その違いや不調和の中に「ある隠されている関係」が発見される場合である。それは、善と悪、強さと弱さ、安全と不安全、知恵と愚かさ、といった対立しつつ並び置かれている不調和の中に、装い pretension や虚栄 vanity が隠されていることが発見される場合である。例えば、自らが強力であるか、あるいは有徳であると思っている人や国家の、その力や徳が本当は、力弱く、有徳でないことが発見さ

2) Ibid. p. vii

3) Ibid. p. viii

れ、—これは喜劇である—更にこの力や徳が実は、それらの人や国家の幻想や虚栄や装いによるものであることが見出された時、状況は「皮肉的」となるのである。そして逆に、人が「愚かさの中に隠されている知恵」や「うわへの罪のうしろに隠されているけがれなさ⁴⁾」を発見する時、これ又状況は皮肉的なものとなるのである。

しかし、人はこの様な皮肉を、即ち、対立的に並び置かれているものの「隠された関係 a hidden relation)」をどの様にして発見することが出来るであろうか。それは容易には発見出来ない。なぜならば、「皮肉は直接には経験され得ないもの⁵⁾」であるからである。それは、この皮肉の状況にすっかり巻き込まれているものにも、又この状況を敵意を持ってみるものにも、理解し難いものなのである。皮肉を理解するためには、批判的でありながら、しかも敵意を含まない様な立場が必要である。この立場は、皮肉の状況の一部を構成している徳の要素を否定するほどはこの状況に敵意を持たず、同時に、ここに含まれている虚栄や装いを度外視する程同情的ではない様な立場である。通常、この状況に巻き込まれている人 *partici pant*, この立場に立ち得る程自己批判的ではない。それ故、通常この立場は観察者 *observer* のものである。しかし問題は、皮肉が観察者によっては理解されるが、その状況への参加者によっては理解されず、皮肉の中に含まれる虚栄や装いが積重なる時には、皮肉は転じて全くの悪徳になってしまうことである。それ故、皮肉は、困難ではあるが、それにも拘らず、その状況への参加者によって、自ら感じられるものにならねばならないのである。かくしてのみ、皮肉はその装いを滅じ、皮肉は解消される方向に向うのである。しかしこの様なことを可能にする道はどこにあるであろうか。

端的に言うならば、皮肉的な観点は、聖書の「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う(ペテロ第一の手紙五章五節)」という聖句の中に、その集約的表現を見出し得る如く、キリスト教の知恵の中に含まれている観点である。この観点を現代史解釈の範疇としたのは、ニーバーの功績であり、又二つの対立し、並び置かれているものを、直ちに止揚するのではなく、その対立するものをきわだたせながら、その間の「かくされた関係」を見出すのは、ニーバー独自の弁証法であるが、ニーバーは常にその知恵の源を、キリスト教信仰の知恵に帰するのである。

ニーバーによれば、キリスト教信仰は、人間の悪を解釈するにあたって、一貫して皮肉的な観点を採用して来た。聖書における神は常に、人間の営みに対し、敵意を抱くことなしにこれを熟視されたが、人間の装いに対しては、笑いをもってこれにのぞみ、この笑いが神の裁きであったのである。聖書における人間の悪の解釈は、人間が自らの自由によって、神の定めた自然的秩序を破ることを悪とするものではない。ギリシヤ神話の神とは異って、これは聖書の神の怒りや裁きを引起しはしない。聖書における人間の悪は、人間が自らの創造的な自由によって、権力、知恵、徳といった面での自らの能力の限界に気づかず、この結果無意識の内に、己れを神とする傲慢に陥ることである。つまり人間が、創造者 *creator* であると同時に被造物 *creature*

4) Ibid. p. 154

5) Ibid. p. 153

であることを気づかないことが悪なのである。人間の創造的自由は、それ自身決して悪ではなく善である。しかし、人間がこの善を無限に押し進めようとする時、或は、押し進め得ると装う時、それは被造物としての限界を破ることになり、その皮肉が、神の笑いという形での裁きを引起すのである。キリスト教信仰の立場では、人はこの裁きの前に、悔改め repent ねばならない。そして、人が信仰の目をもって、自らの皮肉に気づき、悔恨の念にくずおれつつ、悔改めをなす時、その裁きは変じて恵みとなるのである。

そしてニーバーは、皮肉的な観点がこのようなキリスト教信仰の知恵に属する限り、皮肉的状况への参加者が、この状況に含まれる虚栄や装を減ずるためには、己れの絶対化、神格化を避けねばならず、これは究極的には悔改めによらなければならないとするのである。

人が個人的な関係において、皮肉的状况に巻き込まれている場合、その状況への参加者が、道德的次元における自己反省や、謙遜の思いを持つことによって、自己を相対化し、装いや虚栄を幾分減ずることは可能である。又この謙遜の思いと共に宗教的次元に導かれ、悔改めをなすことも可能である。

しかし問題は、個人の如く「自己超越 self-transcendence」の機能を持たず、それ故「非道德 immoral」である国家が、この状況に巻き込まれている場合、悔改めは簡単になされることではないということである。国家を悔改めさせることは不可能に近いのである。それ故、ここに国家の装いを減ずるためには、国家の力を抑制し、国家のイデオロギーの絶対化をふせぐためのよりプラグマティックな政治的手段並びに教育的手段が必要なのである。しかし、このプラグマティックな手段も、悔改めなしには、腐敗し、皮肉はやがて全くの悪徳に変じてしまう。それ故、国家それ自体の悔改めは期待し得ないにしても、国家を構成する個人の悔改めが増し、国家の装いが幾分減じられることが期待されねばならないのである。

ニーバーによる「皮肉」とは以上の如きものである。では、このような観点をを用いて、現代の危機的状况は、より具体的にはどの様に把えられるであろうか。

先にも述べた如く、現代の危機的状况を今尚深刻ならしめているのは、第三次世界大戦の危険をはらむ、米ソの対立であり、更には、この戦争の恐怖を一層強めている原子兵器の出現であろう。そしてこれらは又、今日の皮肉的状况をも特徴づけているのである。すなわち、米ソ両国は、対立しながらも、共に相似た皮肉の要素を内に含み、この皮肉の要素によって、戦争の危険は激化され、原子兵器の生産競争がなされ、その破壊力が人類を恐怖に陥し入れているのである。

しかも、米ソ両国を支えて来た精神的支柱であるデモクラシーとマルキシズムは、共に地上に正義の実現される社会をみざす近代人の希望と共に生まれて来たものであり、1940年代のニーバーの表現を用いれば「闇の子」——ナチスの如く、己の意志や利益の上に置する法則を認めない道德嘲笑者達 cynic ——とは明確に区別される「光の子」——自らを超えた法則を認める者達——であったのであり、又原子兵器の発達も、近代の自然科学や技術の発展と、これに伴う自然征服に対する能力や自由の拡大への近代人の希望と共に生まれて来たものであった。それらはいず

れも善き努力であった。しかしそれだけに、それらが今日、対立や破壊力を生み出していることは、皮肉なのである。

結局、現代の皮肉の状況は、現象的には、原子力戦争の恐怖を含む米ソ両国の対立の中に最も特徴的に見出される、といひ得るであろうが、ではこの様な現象の中には含まれている「皮肉」とはより具体的には如何なるものなのか。私は今少し、このことに立入ろうと思うが、これらの現象の中には含まれる「皮肉」の要素をきわただせるための予備的段階として、その前に、米ソ両国の対立の様相に少し眼を向けておこう。

(Ⅱ)

トインビーは次の様に言っている。「原子力革命は歴史上はじめて戦争という伝統的な手段を絶対行えない程凶暴なものにしたために、その様な戦争を実行不可能にするかも知れない。……しかしながら物質的な敵対行為という字義通りの戦争を全廃することは、競い合いや闘争がなくなることを意味するものではない。……われわれは『まだ旗色を鮮明にしていない』人類の過半数のものの忠節を、共産主義のイデオロギーか、西方のイデオロギーか、そのいずれの側かにかちとろうとして、非暴力的な『伝道戦争』をやっている。そして、〔武力戦争が完全に廃止された〕場合には、『伝道戦争』がいよいよ激しくなる事をわれわれは予想出来るのである⁶⁾。」

確かに、トインビーの言う如く、原子兵器によるあまりにも大きな破壊力は、武力による全面戦争を不可能にするかも知れない。しかし、イデオロギー的対立は残存し、「伝道戦争」は激化されるかも知れない。ただし、米ソの対立の本質は、イデオロギー闘争であるからである。

(補注) トインビーは更に、米ソの今日の対立が、名目的には経済的なものを係争点にしているが、それが単に経済機構上の対立にとどまるならば、即ち、問題が、私企業と国家統制の問題であるならば、問題はもっと簡単であると言っている。普通どの様な経済制度にも、この二つの要素は混合されているものであり、混合の比率、分量の違いが問題なのである。アメリカ、イギリスの経済組織は、いくらか異なるが、これは両国民が相互に信頼と親愛の感情を抱くのを妨げない。それ故西歐陣営と共産陣営間の協力が今まで不可能であったのは、問題となる係争点が、経済上の問題でなく、政治的な問題であり、イデオロギー間の抗争であったからである。

ニーバーは、この二つのイデオロギー間の闘争を、先づ経済力 **economic power** と政治権力 **political power** に対する両者のイデオロギー的相違から捉えている。

政治権力という観点から見れば、アメリカはすぐれた権力均衡 **balance of power** の体制を生み出して来たと言える。独立宣言の起草者ジェファソンは、政府の専制を恐れ、政府が個人の経済的野心に干渉し、個人の経済的自由を侵かさぬ様に、政治権力を牽制し、政府の力を弱めることを願っていた。ジェファソンより、一層現実主義者であり、権力の危険についても深い洞察を持っていたジェイムズ・マデソンも同じく政府の専制を恐れていた。しかし彼は、政府の必要を感じ、政府の力を弱めることによってでなく、政治権力を分散することによって、政治権力の濫用を避けようとし、合衆国憲法の中に三権分立の原則を打建てたのである。そしてアメ

6) アーノルド・トインビー「歴史の教訓」〔松本重治訳〕P. 179

リカは、この二つの考えを基調として、政治権力を均衡させて来たのである。

しかし経済力という観点から見れば、アメリカは極めてブルジョア的なイデオロギーを持ち続けている。ブルジョア・イデオロギーによれば、「各人の自己利益 self-interest が他のあらゆる個人の自己利益によつて抑制され均衡される⁷⁾」故に、社会の調和は容易になされ得ると考えられている。そしてもし、この抑制が不十分でも、「啓蒙された自己利益が、両者の一致をはかる役割を果たす⁸⁾」と考えられたのである。従って、このイデオロギーを持つアメリカは、経済的活動を制約する政治権力を取除くことには熱心であったけれども、経済活動の中に存在し、多くの不均衡をもたらす経済力には無頓着であった。そしてたとえ経済活動の中に、自己利益の追求が感じとられた場合でも、その自己利益の追求は純粋に経済的動機によるものであり、それは経済的合理主義によって調和させ得ると考えたのであり、それ故、経済的活動の中に含まれる自己利益の中にも、人間の「原罪 original sin」に根ざすより深い動機、即ち、トーマス・ホッブスによって「名誉と尊厳の絶えざる抗争⁹⁾」と名づけられた様な「権力と栄光 power and glory」を求める動機が含まれ、これが経済力を調和し難いものになっていることを理解し得なかったのである。

この様なアメリカのブルジョア・イデオロギーに対して、マルキシズムは挑戦する。マルキシズムは経済力を正当に評価し、これが自動的に調和されるものではなく、生産力と生産関係の矛盾を生み出し、一切の社会悪の源となると考える。この場合、経済力は私有財産と同一視される。そして、ブルジョア階級は、——従ってそのイデオロギーを持つアメリカは——、プロレタリア階級によって挑戦され、階級闘争と革命によって経済力（財産 property）は消滅させられ、新しい社会調和が生み出されねばならないと考えられるのである。

他方、マルキシズムに於ては、政治権力はさほど重要なものとはみなされない。それは、経済力に従属するものであり、その道具にすぎないのである。従って、資本主義体制下における一切の政府は、常に虚偽であるとされたのであり、アメリカに於ける様な民主主義的政治型態が、政治的権力の濫用を避けようとして、権力の分散をはかった努力等は、無視されることになるのである。そして又、一方、革命国家は、経済力から解放されている故に、正しきものであり、又やがては国家そのものが消滅する故に、政治権力の濫用の危険はないと考えられたのである。それ故マルキシズムは、政治権力を統御するための何らの手段をも持たない。そして、その結果として、巨大な政治権力の集中の危険を残すことになったのである。

以上述べた如く、政治権力と経済力に対する両者のイデオロギーは異なっている。そしてマルキシズムは、アメリカが、一切の悪の源である経済力（財産）を善きものとする典型的なブルジョア国家である故に、これを非難し、一方アメリカは、マルキシズムが理論上は政治権力を軽視しながら、実際には権力の集中と濫用を生み出していることを非難するのである。

7) Reinhold Niebuhr, op. cit. p. 92

8) Ibid. p. 92

9) Ibid. p. 94

しかし、マルキシズムのアメリカに対する非難は、アメリカの国内問題に関しては、今日必ずしも当てはまらない。なぜならば、現在アメリカは、税法の施行、産業における権力の集中の法による排除、公益事業に必要な独占の政治的統制等に見られる如く、ニュー・ディール以降の政策によって、経済力の可成りの程度を政治によって統制し、福祉国家の道を歩み始めているからである。

それ故、マルキシズムのアメリカに対する挑戦が力を得ているのは、国際的な舞台での両者の対立に於てである。ではそれは如何なるものであろうか。

共産主義はトインビーの言う如く、元来西欧に生れた信条であり、西欧では「異端」に属するものであった。それは西欧という表向きはキリスト教的な集団が、経済的な又社会的な分野ではキリスト教的な愛や正義の原則を適用出来ず、この世における「神の国 De Civitate Dei」を建設し得なかったことに対する西欧自身の自己批判であった。しかし共産主義は西欧の産業世界においては根をおろさず、ヨーロッパにおいて最も非産業的であった東欧のロシアに移し替えられ、成長を遂げ、それが今日では、他の非産業的諸国に対する西欧の政策をソビエトが非難するための手段になっているのである。それは、西欧に生まれた宗旨であっただけに西欧のやり方を批判し、良心的に悩んでいる西欧人の心を動かし、又非産業世界の共感を呼ぶための極めて有効な手段となったのである。

そして一方アメリカは、今日西欧世界最大の強国にまで成長し、国際的な関係においては自由世界という共同体のヘゲモニーを持ち、西欧を代弁する諸政策を行う立場に立っている。それ故共産主義の西欧に対する批判は、特にこのアメリカの対外政策に対する非難に集中するのである。

それ故かつては西欧帝国主義の支配下にあり、最近にいたってこの支配下から独立した国々を、尚自由主義陣営内にとどめようとするアメリカと、これを非難し、これらの国々を自らの陣営に引入れようとしているソビエトの政策は、極めて激しい対立を示すのである。

西欧の産業的・技術的社会と、アジア・アフリカ等の非産業的・非技術的社会との出会いは、歴史的に見れば不幸なことに、搾取するものと、搾取されるものとの出会いであった。ニーバーによれば、西欧はこれらの非産業的農耕世界に、技術と教育を導入し、経済的な面での悪は、マルクス主義が非難する程はひどくなかったけれども、その政策は、強者と弱者の間に必然的に生ずる傲慢や、人種の偏見等の悪から来る精神的憤懣 *resentment* を非産業的な社会に残したのであり、それ故「帝国主義 *imperialism*」「植民地主義 *colonialism*」という汚名はまぬがれ得ないものであった。

しかも、これら非産業的社会の多くは今尚貧困である。そしてその貧困は、帝国主義の経済政策によるばかりでなく、むしろそれぞれの社会が持っていた封建的不正義や、農耕社会の低い生産性による面が大きかったのであるが、これが精神的な憤懣と結びついて、全く西欧資本主義の悪に帰せられるのである。

この様な状況の下で、今日アメリカがとる対外政策が、マルクス主義の理論によって、「搾取的 exploitative」と規定されると、それは今尚非産業的社会には極めて当を得たものと理解される。一方非産業社会から技術社会へと飛躍した今日のソビエトという実例は、これらの社会において共産主義を極めて魅惑的なものにするのである。

トインビーは、共産主義陣営と西欧陣営の対立は、単にイデオロギー的対立であるにとどまらず、現在は「対抗的な立場にある二つの宗教の間の精神的闘争¹⁰⁾」であると語っている。共産主義は、自らが宗教であることを否認するが、トインビーによれば、それは従来から存在する宗教の一タイプ、すなわち、集団の人間の権力を崇拜する「宗教」であり、これが、個人としての人間の人格の神聖さを崇拜する西欧の宗教と相争っているのである。

ニーバーも共産主義がある面では一種の宗教的性格を持つ信条であることを認める点で、トインビーと軌を一にする。共産主義はその理論において「科学的」であることを主張しているが、科学が決定し得ない様な信条を前提にしている。それは、人間の経済的衝動に対しては科学的な分析を加えるが、プロレタリア階級の利益を最後のなものとみなす事に於て、又プロレタリア階級の力を歴史が法則に従って発展するための究極的な原動力となす事に於て、更には、革命の後に、普遍的正義を実現する「自由の王国」を設定する事に於て、科学では決定し得ない様な希望や信仰をその内に含んでいる。そしてこれらは、この「宗教」に、西欧の宗教が等しく持ち、自然の支配や歴史の形成に、大きな力を与えて来た歴史的ダイナミズムを附与するのである。しかも共産主義の歴史的ダイナミズムは、キリスト教等の場合とは異って、直接的に政治のプログラムと結びつけられており、又実践的、現実的であるので、それが歴史を左右する力は極めて大きいのである。

東洋の文化の支柱をなす諸宗教には、この歴史的ダイナミズムが欠けている。それ故東洋の文化は自然科学を発展させなかったし、歴史も西欧に比して動的に展開を遂げることが少なかった。この様な東洋の文化の中に、社会制度に対する大きな破壊力を持ち、しかも「科学的」であることを主張する故にキリスト教よりも理解しやすく、又技術的成果に裏づけられた共産主義が導入された時、それが極めて魅力に富んだ信条として、一種の宗教的感情と共に受入れられる様になったのは、極めて当然なことであったのである。それは、敗北主義 defeatism 的な宗教にあきあきし、貧困に悩んでいた非技術的社会に、技術をもたらし、彼らを貧困や不正義から解放する希望を与えるものとなったのである。

(補註) ニーバーは、元々国内的な階級闘争の理論であったマルキシズムの理論が、国家間の階級闘争にまで適用される様になった事、又マルクスに於ては工業労働者のみを指していた「プロレタリア階級」の概念に、農民を含めたこと、——これによってロシア革命は可能になった——は、レーニンの功績であると指摘している。 The Irony of American History p.109 Pious and Secular America Chap 4, p. 48

10) トインビー 前掲書P. 184

一方、個人に対する尊厳を中核とする西欧社会のデモクラシーの信条は、これらの非産業的
 社会にはあまり説得力を持たない。なぜなら、これらの社会は、デモクラシーが前提にするものを、
 社会的、経済的な面だけでなく、精神的な面でも共有していないからである。東洋の諸宗教は、
 仏教やヒンズー教の如く、神秘的・汎神論的 *mystic or pantheistic* であるか、あるいは儒教
 や神道の如く、家族主義的・集合主義的 *collectivistic* であるかのいずれかである。すなわち、
 個人的存在が神へ合一することを究極の目的とするか、家族や民族という集合体をよりどころ
 にするかのいずれかであり、結局、西欧のキリスト教文化に於て「個人の尊厳 *dignity of the*
individual」が唱えられる場合の如く、「個人の精神的及び物質的生活の完全な結合の中で個人
 の意義を見出す¹¹⁾」努力がなされることが少なかったのである。

結局、現在の米ソの対立において、特に非産業的世界に対する「伝道戦争」において、共産主義
 は、西欧の信条に対して有利な地点を占めている。そしてこれに対して、西欧世界、特にアメリカ
 は、「個人の尊厳」を守るために自由諸国家を結集しようとし、対立は深刻さを加えるのである。

けれども、ニーバーはこの対立は、解消されないまでも、緩和さるべきである考える。そし
 て、この様な対立緩和への一つの手がかりとして、両者の間にある皮肉の要素をあきらかにし、
 これを減ぜしめようとするのである。

(Ⅲ)

「皮肉」的な視点を米ソ両国に向けるならば、これらの両国は、共通せる二つの「皮肉」の要
 素を持っていると言える。即ち、「けがれなき *innocency*」の意識であり、又「メシヤ = ズ
 ム *messianism*」の要素である。

二十世紀の初期においては、未だ取るに足りない弱国であったこの両国は、今や世界を二分し、
 歴史の運命を左右する強国になって対立しているが、このことの中に、両者の皮肉はある。

すなわち、これら両国は、強くなった今日においても、尚弱き頃の幻想を抱き続けたり、理論
 からくる装いをもち続けたり、あるいは逆に、現在の強さや、理論や神話からくる、力や正義感
 の意識に幻惑されて、自らが歴史を救済しうる歴史の運命の主人 (*master of destiny*) だと
 装いながら対立している故に皮肉なのである。

ではこれらの皮肉はより詳しくは、どの様なものであり、又どの様な形をとってあらわれて来
 たものであろうか。

先ずアメリカの「けがれなき」の意識について述べるならば、これは二つの面から考察し得
 る。すなわち第一は、アメリカ建国初期の神話に基づくものであり、第二は、ブルジョア・イデ
 オロギーからくるものである。

ヨーロッパにおける宗教的頑迷さや、封建的専制政治の圧政を逃れて、新天地を求めてアメリ
 カ大陸に渡って来た初期のアメリカ人達は、我々こそ新しい人間や社会を創造すべく、神によっ
 て召されたのだと信じていた。しかも、これらの父祖たちの信念の支柱をなしていたのは、アメ

11) Reinhold Niebuhr, op. cit. p. 124

リカの二つの精神的伝統、カルヴィニズムとジェファソンニズムであった。両者はその内容に於いて可成り異なっていたけれども、アメリカがヨーロッパの悪徳から離れた「けがれなき国」であり、神によって新しい使命を与えられた「アメリカ版イスラエル民族 American Israel」であるという意識においては、共通性を有していたのである。

ニュー・イングランドの清教徒達によって信奉されたカルヴィニズムは、純粋な教会の創造を第一義とし、新大陸に建てられる教会が、「イエス・キリストは、人の子らが且て見なかった程完全に、彼の王者の御業をあらわし給う¹²⁾」程清浄であり、世界の如何なる教会よりも「けがれなき」ものであると考えたのであり、又ジェファソン主義者は、アメリカがも早、ヨーロッパの専制政治と手を切っており、又新大陸の広大な経済的機会が、社会悪の発生をくいとめるであろうから、新らしい政治的コミュニティの創造が可能であると信じていたのである。しかも、清教徒達の純粋な教会の創造という確信も、大陸の豊かさからくる期待によって「主が新しき天、新しき地、新しき教会と新しき共和政体をともどもに創造し給う¹³⁾」という、ジェファソンニズムと相似た、社会への希望を含んで来たのである。

アメリカにおける第二の「けがれなき」の意識は、ブルジョア・イデオロギーからくるものである。ブルジョア・イデオロギーは、先に見た如く「各人の自己利益が、他のあらゆる個人の自己利益によって抑制され、均衡され」、そこに合理的な調和がもたらされると考えている。それ故、経済力は本来無害なものであり、「けがれなき」ものであると考えられる。しかし、歴史が証明して来た様に、「経済活動が徹底的に放任されるならば、弱肉強食となって、独占権が競争にとって代ることになるか、さもなければ競争が社会に危機を生み出すかのいずれかであり¹⁴⁾」、経済力には不均衡が生ずる。しかしブルジョア・イデオロギーは、権力は本来政治的なものであり、——何故なら初期のブルジョア階級にとって、権力はブルジョアに対する貴族の特権的利益を代表するものであったから——経済面に権力があることを認め得ず、政治権力を減ずることのみを望んだのである。

アメリカは殆んど一貫してこのイデオロギーを採用して来た。そして自然の豊穡さと、「産業編成の技術的能率や自然科学の成功¹⁵⁾」に支えられて、殆んど危機を経験することなく、——1929年の経済恐慌は、その例外の一つであるが——「けがれなき」の意識と共に、その巨大な経済力を発展させて来たのである。アメリカは、この経済力を伸張させるために、ごく最近まで帝国主義や植民地主義という手段を取る必要を感じない程、豊かな資源と市場に恵まれていた。それ故、そこには、マルキシズムがヨーロッパの経済社会に指摘した様な、経済力からくる悪はさほど多くはなかったのである。

この様に経済力の悪を知らず、又政治権力を巧みに均衡させて来たアメリカは、又ヨーロッパに見られる様な、「人種の忠誠、歴史的伝統、軍事力、イデオロギー的希望などの複雑な合成

12) Ibid. p. 25

13) Ibid. p. 25

14) Reinhold Niebuhr, *The Children of Light and the Children of Darkness* p. 114

15) Reinhold Niebuhr, *The Irony of American History* p. 39

体¹⁶⁾」である権力の歴史的形態に、遭遇したり、それを管理したりする経験を殆んど持ち合せなかったものであり、それ故アメリカは、権力については殆んど盲目であり、その濫用の危険についても殆んど知ることがなかったのである。

しかし、アメリカが強国になり、又国際社会への関係が強まった現在、——アメリカは一度は孤立主義によってこの関係を回避しようとしたのであるが——これらの「けがれなき」の意識は単なる意識にとどまらず現実に皮肉を構成する「幻想」になったのである。すなわちアメリカには、新たな権力の濫用 *abuse of power* の危険があらわれて来た。それはアメリカが巨大な軍事力 *military might* を持つ様になったからである。しかもその軍事力は、皮肉なことに、アメリカが「けがれなき」の意識と共に発展させて来た経済力から直接引出されて来たのである。アメリカは権力については盲目であったので、この巨大な軍事力を適当に牽制する手段を知らないのである。そして初期の神話とブルジョア・イデオロギーからくる「けがれなき」の幻想と共に、この権力を所有しているのである。しかし、この軍事的権力の濫用の結果は、原子兵器の使用であり、人類を破滅に陥れるかも知れない戦争である。

現在のところアメリカは、政治権力によって、この軍事力をどうにか抑制してはいるが、それは十分な保障とはならないのである。アメリカの実業界にとって、権力は「未知の国 *terra incognita*」であるので、彼等はしばしば、自らの欲望を直接的にこの権力の使用に訴えたいという誘惑にかりたてられるのである。そしてアメリカが、自らの正義感と「けがれなき」の幻想のもとに行う対外政策や対外援助が、他の国々には軍事力の誇示としてしか受け取られず、アメリカの「けがれなき」がさほど評価されない時には、これを不満に思い、軍事力の誇示によってその政策を認めさせようという矛盾した行動にかりたてられるのである。

現在のアメリカにとって、「けがれなき」の意識は、もはや迷想であり、虚妄である。アメリカがも早この意識を捨て、より成熟した態度でもって、軍事力の抑制の手段を講じ、又対外政策にあたらねば、危険は避け難い。そしてかくすることによってのみ、アメリカのもつ皮肉が全くの悪徳に変わることなく、状況は、いくらか皮肉を減ずる方向へ向う可能性が生ずるのである。

次にソ連がもつ「けがれなき」の意識に目を向けるならば、それは専ら、マルキシズムの理論から来るものである。マルキシズムは、経済力が調和をもたらすよりは、生産力と生産関係の矛盾をもたらすと考え、この経済力を私有財産と同一視する。人間はこの財産制度によって墮落させられているのであり、それ故この制度を廃止すれば、「兵隊、憲兵、巡査、知事や裁判官、牢獄、法律や訴訟はどれ一つ存在しない¹⁷⁾」(エンゲルス)、原初の、牧歌的な、「けがれなき」状態に復帰することが出来ると考えている。この「けがれなき」への復帰の主導者は、プロレタリア階級である。なぜならプロレタリア階級は、自ら守るべき利害(財産)を持たず、又階級闘争と革命を通して「生産力の専有様式」を廃止した後には「社会の生産力の主人¹⁸⁾」になり得

16) Ibid. p. 76

17) Ibid. p. 19

18) Ibid. p. 19

ない故、「けがれなき」ものとされたのである。

しかしマルキシズムにおけるこの様な「けがれなき」の意識は、マルキシズムの理論や実践が「定義によって by definition」一貫したものであると、装われる時皮肉となるのである。すなわち、ここでは近代における社会の悪は、一貫して、私有財産制度を有する資本主義国家の帝国主義の罪に帰せられ、プロレタリア階級や革命国家は、一貫して罪や悪から解放されているとみなされるが、しかし、マルキシズムが装う程、現実の革命国家やプロレタリア階級は「けがれなき」ものであろうか。ユーバーは、この「けがれなき」の意識が、これ又、アメリカの場合と同じく「幻想」であることを、三つの点で指摘する。

その第一は、マルキシズムが経済力と私有財産を同一視し、財産を所有しないものは「けがれなき」ものであると装ったところから起ってくる。すなわち、マルキシズムは、経済力の今一つの形態である「経営者の権力 the power of the manager」を認めることが出来なかった¹⁹⁾。それは私有財産の所有者の権力と悪を認め得たが、「財産の社会化 socialization of property」の名の下に、財産が巨大な政治権力に委託された場合の経営者たる政治家の巨大な経済力とそれがもたらす悪を認めることが出来なかったのである。

マルキシズムが装う「けがれなき」が「幻想」であるとされる第二の点は、マルキシズムが政治権力を経済力に従属するものとし、正しい経済体制をもった今は、一切の政治権力から解放されているとする点から生じてくる。それは一時的な政治形態として、「プロレタリア階級の独裁 dictatorship of the proletariat」を規定するが、共産主義が究極に於て世界を征覇すれば、一時的な独裁による強制は勿論のこと、あらゆる形態の政治的強制の必要も次第に除去されると考えている。

しかし問題は、理論上は一時的な「プロレタリア階級の独裁」にのみ許された政治権力の独占が、現実においては、「階級の独占 the monopoly of a class」から次第に「党の独占 the monopoly of the party」になり、それが又「少数の指導者の独占 the monopoly of a small oligarchy」になるという、政治権力の集中の方向をたどって来た事である²⁰⁾。そしてこの集中された政治権力が、更に経営者としての経済力と組合わされて巨大なものとなり、少数指導者は、この様な権力を理論上は権力の共有者であるべき筈の階級や党の上に半永続的に行使しているのである。

そして、マルキシズムの「けがれなき」は第三に、その対外政策において「幻想」となる。マルキシズムの理論からは、共産主義国が戦争を始める事、又共産主義国家間の反目は、「定義によって」不可能である。ブハーリンは言う。「戦争を起すのは、原料、市場を獲得するための独占資本主義の競争である。資本主義の社会は利己的で競争的な単位から出来ている。それ故戦闘中の世界である。共産主義社会は無利己的で調和的な単位からなりたち、それ故定義によって平和

19) Reinhold Niebuhr, *Christian Realism and Political Problems* p. 30

20) *Ibid.* pp. 34-35

裡にある世界となるのである。丁度資本主義が戦争なしに生きる事が出来ない様に、戦争は共産主義と共に生きる事は出来ない²¹⁾。」と。しかしニールは、多くの歴史的現実を照らして、共産主義国家が戦争から全く解放されているとする断定は、これ又幻想であると言うのである。

以上、三つの点から見た様に、マルキシズムの理論からくる「けがれなさ」の意識は、歴史の現実を照らしていくらかくい違をみせている。そしてそれがもたらす悪は、アメリカに比して決して少なくはない。ニールは、マルキシズムの理論が、元来正義の秩序を地上に打建てようとするものであっただけに、それがもつ、過度の正義感、かえって装を強い、自らそれに気づかないで、多くの悪を生み出していると考えるのである。

以上述べて来た「けがれなさ」の幻想に加えて、現在この対立せる二つの国を皮肉の状況に巻込んでいる要素は、この両国が持つ「メシヤニズム」の意識である。先に述べた「けがれなさ」の意識が皮肉を構成するのは、現在強国になっている両国が、夫々のイデオロギーか、神話によって、強国の傲慢が生み出す悪を、正当化し、自らが尚、弱き頃の徳を持つものであることを装うことにおいてであったといえよう。しかし、「メシヤニズム」はこれとは逆に、この両国が自らの力や徳を過信し、世界を救済し、自らが歴史の運命の主人になろうとするところから生じて来るのである。両者は、自らが思っている程には強力でもなく、有徳でもないのに、それを装っているのである。そして、その高ぶれる正義感によって、現代にバベルの塔を打建てようとし、世界はその傲慢による装いを、不安と恐怖におののきながら見守っているのである。

しかし、「メシヤニズム」の要素は、「けがれなさ」の意識と相似た根から出て来るものである。それらは、あられ方は異なるが同じ意識が表裏をなしているとも言えよう。そして、それは両国に於ては、次の様な根とあられ方をもつのである。

共産主義の「メシヤニズム」の意識は、「けがれなさ」の意識と同じ様にプロレタリア階級に特別な地位をあたえることから出てくる。そして、マルキシズムの「けがれなさ」の意識が、プロレタリア階級を「けがれなき」ものと定義したことから出て来たのと同じ様に、「メシヤニズム」の意識も、プロレタリア階級を、理論によって、偉大なるものであると規定した、その「偉大さの幻想」から起って来るのである。マルキシズムにおいて、プロレタリア階級が偉大であるのは、それが、革命の担手として選ばれたものであり、新しい「自由の王国 realm of freedom」に於ては、「社会の生産力の主人公」となるものだからである。しかし、それだけではなく、プロレタリア階級は、可能性においては人類全体の代表者なのである。なぜならば、プロレタリア階級の運動は、全人類のためになされる世界救済の運動であるからであり、ここにプロレタリア階級は、歴史の運命の支配者としての性格を与えられている。

しかし、現実においては、プロレタリア階級の偉大さは、「党 party」の偉大さに転化されている。プロレタリア階級は、「党」の指導なしには、「労働組合心理 trade union psychology」を脱することは出来ない。それ故、党は、マルクス・レーニン主義の知恵によって武装さ

21) Reinhold Niebuhr, The Irony of American History p. 20

れ、理論によって与えられた歴史の目的を推進して行く歴史の運命の主人なのである。そしてソビエットにおける「メシヤニズム」の多くは、この「党」の指導者を、絶対化し、神格化することから生じてくるのである。

次にアメリカの「メシヤニズム」も「けがれなさ」の意識と同じ様に、アメリカが神の寵児であるという摂理感から出て来たと言えよう。すなわち、アメリカの建国は、ワシントンの就任演説に見られる如く、神によって人類に委託された一つの実験であるという考えに支えられて来た。ワシントンは言う。「神聖なる自由の火の保存と、共和国政体のモデルの運命は、いまや恐らく徹底的且つ最後の、アメリカ人民の手に委ねられたこの実験にかけられている様に思われる²²⁾。」このアメリカが神によって選ばれた国であるという意識がアメリカの「メシヤニズム」の根であり、皮肉を構成するものである。それは、ワシントンに於ては、未だ温和であるが、ある上院議員によって発せられた次の言葉は、アメリカの「メシヤニズム」の傲慢の最も先端的な表現である。「神は渾沌の支配しているところに組織を確立するため、われわれを世界の組織者のおもなるものとなし給うた…。神は野蛮なまたもうろくした国民の間で、政府を管理しうる様に、われわれを統治に長じさせ給うたのである。もしこの様な力がなければ、この世界は再び野蛮と暗黒の中に沈むであろう。そして、この民族すべての中で、神は世界の再生を結局指導すべき選ばれた国民として、アメリカ人をするしづけ給うたのである²³⁾。」

アメリカの「メシヤニズム」には、いま一つの根がある。それは自らが歴史の運命の支配者になるとうとする近代人の努力の自由主義版である。それは簡単に言うならば社会の悪を単なる自然悪とみなし、これに自然科学的方法を適用することによって悪を除去し、社会に調和をもたらし、歴史を支配しようとする努力なのであり、この努力がアメリカに於ては最も典型的な形であらわれており、又これが、「メシヤニズム」の一つの要素となっているのである。

結局両国における「メシヤニズム」の要素は以上の如くである。それらは「けがれなさ」と同じように、両国が弱き国である間は、その傲慢からくる悪も少なかった。しかし、両国が強国になり、夫々が巨大な経済力と共に、巨大な軍事力を持つ様になった現在、この「メシヤニズム」は、有害なものとなる。そしてこの「メシヤニズム」を究極的に除去する道は、ニーバーにおいては悔改めである。しかしより現実的には、それがたとえ、究極的な解決ではなく、相対的な、「近似的解決 proximate solution」であるとしても、共存を可能にし、戦争をもたらさない様な政治的手段、又「皮肉」を減ずる様な教育的、道德的手段が考えられねばならない。

(Ⅳ)

ここまで我々はニーバーに従って、現代の皮肉の状況をあきらかにし、現象的には現代の危機を典型的に示している米ソのイデオロギー的対立を取上げ、その背後に共通なものとして見出される皮肉の要素を取出して来た。そして今日「皮肉」の時代という名で呼ばれる危機的状況を克

22) Ibid. p. 70

23) Ibid. p. 71

服する道は、ニーパーにあっては究極的には人々を悔改めに導くことである事を示したのである。しかし先に示唆した如く、早急に世を悔改めさせることは困難であり、現実的には、政治及び教育という手段に待つことが大きいとするならば、我々が特に教育について考え、教育という機能を通してこの「皮肉」を減ずる方向に何らかの貢献をなそうとする場合、それはどのような形の教育を通してであろうか。我々はこの小論の結論としてこのことを二つの点から考えてみよう。すなわち、第一の問題は教育の主体であり又対象であり同時に教育の目的をもあたえる人間を、この様な時代にあっては如何なるものとして捉えるかという教育における人間観の問題であり、第二は、皮肉を減ずる様な教育の形式は、如何なるものであればよいかということである。先ず人間観の問題を先の二つのイデオロギーとの関連において述べて行くならば、それは次の如くである。

先に我々は、米ソのイデオロギーにおいて、ブルジョア・イデオロギーが、自己利益は自動調和をなすものであり、したがって経済力は無害であり、社会における悪は専ら悪しき専制的な政治権力乃至は政治組織によってもたらされるとみなすことにふれたのであるが、これを人間観の観点から見れば、そこに人間の善性への信頼がみられるのである。すなわち、アダム・スミス以来のブルジョア自由主義の考えは、その内容は多岐にわたるが、それは大きくいて「政治上の制度が人間を腐敗させさえしなければ人間は善である」という立場をとるか、「不完全な経済組織に元来含まれている悪が取除かれるならば人間は善でありうる」という立場をとるか、或は「この悪は無知によってもたらされたものにすぎず、それ故不公平で特殊に偏した忠誠より人間を救い出すためには、もっと完全な教育過程が案出されればよいと考える²⁴⁾。」という立場をとり、いづれにしても、人間の善性を信頼する立場であったのである。

一方このブルジョア自由主義に反旗をひるがえしたマルキシズムのイデオロギーは、経済力を無害だとはみなさず、これを私有財産と同一視し政治権力の悪しきあらわれである私有財産制を可能にする経済組織に一切の社会悪の源をおくものであった。そして又、政治権力の悪しきあらわれである専制政府もこの様な階級支配の結果であり、又手段であるとなされ、更にこの様な階級支配によって人間も又本来の姿から疎外されるとみなされたのである。それ故、人間観の観点からみれば、疎外の結果としての人間悪はありうるが、人間は本来は善なるものであるという人間の善性への信頼がここにもみられるのであり、私有財産制を全く撤廃し、階級を除去することは、人間の本来の善性を回復することとなるのである。

畢竟、ブルジョア自由主義とマルキシズムは、その内容の相違にもかかわらず、社会悪乃至は人間悪の一切を社会的制度に帰し、人間観において、人間の善性を信ずるという楽観主義を持つ点で共通しているのである。

しかし、このことは、ブルジョア自由主義、マルキシズムのいづれもが、時には悪魔的な狂暴

24) Reinhold Niebuhr, *The Children of Light and the Children of Darkness*

性をもつ人間乃至は国家の自己中心的な欲望を、正しく見抜きえないことを示している。ニーバーによれば、人間は個人的な形態にせよ、集団的な形態にせよ、善であると同時に悪をもつ二重的存在である。しかし、この両者は人間の善性への樂觀性を持ち、又「自らを超えた法則を認める」理想主義的な「光の子」であっただけに、且つては自己中心的欲望を自らの絶対的な基準として、その悪魔的狂暴性をほしのままにしたナチスの如き「闇の子」に殆んど打負かされようとしたのである。

そして、先の考察で見た如く現在の状況においては両者は対立し、共に「皮肉」の要素に気づき得ず、自らの内にある自己中心的な欲望を理想の名において正当化せんと装うことによって、かえって「皮肉」を増し加えているのである。

しかしながら、このような歴史の現実による反駁にもかかわらず、両者の人間観が共に人間の善性を信ずる樂觀主義を持ちえたのは、これら両者の人間観を含むルネッサンス以来の近代的人間観がその種類の多様性と内容の異なりにもかかわらず、等しくキリスト教の人間観が有していた原罪観を否定し、無神論的傾向を強め、キリスト教の神の支配をはなれた自律の人間への信頼をもって来たからであるとニーバーは考えるのである。²⁵⁾

このことに関してヒュームの次の言葉は印象的である。「ルネッサンス以来のあらゆる思想は、明らかに多様性を持っているが、それにもかかわらず一つの統一的全体を形づくっている。……どの思想も、すべて人間観に関する同じ概念の上に立ち、どの思想も、すべて同様に原罪の教理の意味を認識することが出来ないことを示している。この時期においては、その時代の哲学、文学、倫理学などが人間を根本的に善なるもの、満ちたりたもの、また万物の尺度とするこの新しい人間観に基づいていたというだけではなくて、この時代独特の経済上の特徴の多くが、この中心的な抽象的概念の産物と見なされるといことが立証出来るのである²⁶⁾。」

ニーバーによれば、キリスト教人間観は人間を次の様に捉えている。すなわち、人間は有限であり、同時に自由である様な矛盾的な、逆説的二重性を持つ存在である。人間は神によって創られた被造物であり、神の定めた制約を究極的には免がれ得ない故に有限であるが、一方、「神の像」に似せて創られたものであり、精神と自由を持つ存在である。そしてこの自由によって、人間は自己超越 self-transcendence をなすことも出来、自己及び世界を超えた立場から、生を追求し、歴史における創造をなすことも出来る。しかし、この創造性は同時に破壊性を生み出す。なぜなら、人間の自由の創造性が如何に無限にみえる場合でも、それは人間の被造性を除去しうるものではないのであるが、人間の野心と欲望は、自由をかりたてて、能力や美徳の無限の拡大を夢見させ、その創造性があたかも無限であり、人間は神の如く自然や歴史の全き支配者になり得ると誘惑し、且つ装わしめるのである。そして、神に逆って自己を神格化し、又他者に対しては、その高ぶれる傲慢や装によって自己の目的のために他者を手段化することを辞さないの

25) ニーバーの主著『人間の本性と運命, The Nature and Destiny of Man』Vol. I には、「古典的人間観」「キリスト教人間観」との対比を通しての「近代的人間観」の詳細な検討がある。

26) T. H. Hume, Speculation p. 52

り、これが創造性と同時に生ずる破壊性であり、換言すれば、自由と共に生ずる罪なのである。そしてキリスト教人間観においては、罪は常に自由と共に、自由によって犯されるものであるから、それを単に肉体的衝動に帰し、精神と切離すことは出来ない。精神と肉体との両者の統一体としての自我の根元的な制約としてそれは存在しているのである。そして又、罪は常に創造性と共に考えられるものであるから、人間を全く悲観的に見るものではない。しかし、創造性は罪の制約と共に考えられるから、人間を全く楽観的に見るものでもない。悲観と楽観の両者を含み、その緊張関係において人間は捉えられているのである。

しかしルネッサンス以来の近代的人間観は、人間の自由の創造性のみを評価し、有限性並びに自由の否定的契機としての罪意識を認めることを拒否し、一方、時を同じうしてあらわれた「進歩」の歴史観にも支えられて楽観主義の方向を殆んど一貫してたどったのである。

尤も近世の初頭においては、時代の担い手となり、又人間の罪の問題、又超越者を知りうる人間の究極的自由の問題にも深い理解を示した宗教改革の思想が存在した。しかし、これは、自然科学の発展に裏付けられて次第に近代の主流となったルネッサンスの流れに圧倒され、又それ自身、超越的且究極的な基準を、歴史や文化における相対的な諸問題に結びつけることに失敗し、悲観主義的な敗北主義乃至は超越主義(ルター)に陥るか、絶対主義的な律法主義(カルヴィン)に陥るかして次第に力を弱めて行ったのである。

我々が教育における人間観を問題にする場合、我々は近代の教育学がその基盤をおいて来た人間観として、ルネッサンス以降の近代的人間観に出会うのである。近代的人間観は、その種類において多様であり、内容において夫々異なる点を有しているけれども、ニーバーは、これを三つの類型に分けている。すなわち、(1)理想主義的合理主義 **idealistic rationalism**, (2)自然主義的合理主義 **naturalistic rationalism**, (3)浪漫主義的自然主義 **romantic naturalism** である。そしてこの三者はいづれも、大体に於て楽観主義的であり、——尤もショーペンハウエルやニーチェの悲観主義もなかなかったが——キリスト教の原罪説を否定することにおいては共通性を有していたのである。理想主義的合理主義とは十六世紀までのルネッサンスの人間観(ブルノー、コペルニクス、ダヴィンチ等)及びドイツ観念論の人間観(カント、ヘーゲル)である。そしてここでは精神は理性と同一視され、理性は一切のものの生命力と形式の源として神格化される。そして人間の自由や自律性が強調される。又同じ合理主義であり、一面理性の自由と自律性を保ちながら、他面自然的秩序乃至は自然調和を考えるのが自然主義的合理主義であり、(フランシス・ベーコン、モンテニュー、デカルト、スピノザ、ロック、ヒューム、ミル等)、これは十七世紀以降に力を得、主として近代ブルジョアジーによって担われたものである。そして第三の浪漫主義的自然主義は、理想主義的合理主義による理性の強調に反抗し、理性を裏切る自然的生命力(個性)の力を強調したのである。(ルソー、フロイト、ニーチェ、マルクス、デュレー——マルクス及びデュレーを浪漫主義と呼び得ない面も多いが)そして、これは思想史的に見れば、合理主義的な人間観に対する反抗であるが、社会史的には、下層中産階級及び、労働者階

教からの、ブルジョアジーに対する反抗運動を支えるものとなったのである。近代教育学は、これらの人間観を基盤として取入れ、理想主義的な教育学、功利主義的な教育学、自然主義的な教育学、浪漫主義的な教育学等を展開し、夫々の立場から、教育目的としての理想の人間像を描いて来たのである。

しかし、上に述べた如く、この様な近代の人間観が、いずれもルネッサンスの伝統を受継いで、キリスト教の原罪観を拒否し、楽観性を持ち続けて来たことは、我々が現在、「皮肉の時代」にあって教育の問題を考える場合、次の様な問題を生み出すことになる。すなわち、例えば、理想主義の教育学者ヘルバルトの思想の中には「教育学の根本命題は生徒の陶冶性 *Bildsamkeit* である」という大前提があり、ここには生徒の陶冶可能性、乃至は教育可能性が、何らの限定なしに肯定され、信頼されている。又ルソーの『エミール』の冒頭には、「生れたままの自然人」に対する信頼が語られており、又下ってデューイの教育思想には、人間の「可塑性 *plasticity*」乃至は生長可能性への信頼がある。そして、これらはいずれも、ボルノーによって言われる如く、「人間におけるよき能力への力強き信仰²⁷⁾」によって支えられているのである。

しかし、我々は、今日の「皮肉の時代」にあって、人間の善性の成長を無条件に信ずることが出来るであろうか。確かに多くの教育思想において説かれている如く、子供は大人に比してより多くの善性をもっていると思われる。そして多くの教育者はこの子供の善性が、すこやかに成長することを願いつづけて来たのであるが、しかし彼らが目指した理想の人間像と現実に産み出された人間の姿は、あまりにも大きくへだたっていたのではないだろうか。又子供の本性そのものの中にも、——例えば子供の手におえないいたずら等に見られる如く——全く善性とはいえない悪への可能性が見られるのではないだろうか。

我々はここで、子供を含めた人間の善性を否定しているのではない。善性は、それだけでは充足的なものではないが、充分評価され、信頼されるべきであろう。しかし、善性が何らの否定的契機もなく、自己充足的なものとして肯定される時、それは、悪を生み出さないまでも、偽善的な装いと共に、「皮肉の状況」に巻き込まれてしまうであろう。

先に見た如く、キリスト教人間観は、自由と罪を逆説的に捉えることにおいて、自由の創造性と破壊性が同時に起ることを示し、又人間の本性が善であると同時に悪であることを示している。したがってそれは、逆説的な人間観であり、矛盾するものを緊張関係において捉えている人間観である。しかしそれは又、楽観主義ではないが悲観主義でもない。私は、「皮肉」の時代における教育的人間観が、人間をこの様な逆説的な関係でとらえ、善性を肯定しながらも、それに対する否定的契機を常に予想している様な人間観であるならば、教育学は、近代教育学の問題点を克服して新しい方向へ向うるのではないかと思う。そしてこの様な人間観の形成にあたって、我々は、キリスト教人間観の知恵から多くを学ばねばならないと思うのである。

27) O. F. Bollnow, *Das veränderte Bild von Menschen und sein Einfluss auf das pädagogische Denken*, in "Erziehung Wozu?" S. 35

京都大学教育学部紀要Ⅵ

次に「皮肉の時代」における教育の第二の問題としての教育の形式の問題に極めて簡単にふれるならば、それは以下の如くである。

シュプランガーによれば、教育の形式は、三つの層 Schichten において捉えられる²⁸⁾。すなわち、「養護 Pflege」であり、「伝達 Überliefern」であり、「覚醒 Erwecken」である。「養護」とは心身の発達に対する配慮であり、身体及び、それと結びついている心的機能に対する配慮である。そしてこれらを育てることである。又「伝達」とは既成の文化の伝達であり、知識の伝達である。そしてここでは、「伝達」を可能にする様な精神の内的活動も考慮されている。そして「覚醒」とは内的な精神がめざめることである。そしてこの「覚醒」は何らかの永遠なるものとの関わりにおいて、非連続的に起る様なものである。我々は先に、人間観の考察のところ、人間は善への可能性だけをもつものではなく、同時に悪への可能性をもつことを述べた。それ故、近代教育学における「陶冶可能性」や成長可能性は、同時に悪への可能性をもたらすものであるかも知れない。そして近代の教育は、「養護」や「伝達」という形式を用いて、連続的に教育をなして来たが、この様な形式を通しての教育は悪の可能性に対して無防備であり、それ故、悪を抑制するためには、永遠なるものとの関わりにおける精神の目ざめにおいて、自己の悪への深い洞察と、自己反省とを可能にする様な非連続な「覚醒」という教育形式が導入されねばならないであろう。そしてそこではもはや宗教と教育との限界は、はっきりとは区別し得ないであろう。

しかし、「皮肉の時代」にあって我々が教育の問題を考え、「皮肉」の減少のために、我々がキリスト教の逆説的人間観から我々が多くを学びながら、その形成を目指す理想的人間像は、この「覚醒」という形式を含んだ教育を通してのみ形成されるものではないだろうか。

28) Eduard Spranger, Pädagogische Perspektiven.